

## 後期授業参観報告

これまで「後期参観授業」と称していたが、平成 27 年度より、「後期授業参観」と呼称を変更した。

### (1) 環境園芸学科

授業参観として 3 授業を開催した。参加者数は全授業で昨年度は 10 名、今年度は 8 名とこれまで同様に極めて少なかった。授業参観への参加者からは有意義な刺激を受けたとの印象が伝えられていたが、このように参加者が少なく、貴重な FD の機会が活かされていない。さらに参観の機会を促すために開催数を増やす等、対応策を検討する必要がある。

表 平成 27 年度 環境園芸学科授業参観と参加者数

教員氏名	参観授業名	実施日時	参加人数
川信 修二	施設園芸論	1 月 13 日(水) 4 時間目	1 名
山口 雅篤	植物生理学	1 月 18 日(月) 1 時間目	5 名
陳 蘭庄	植物資源科学	1 月 18 日(月) 2 時間目	2 名
		合計	8 名

### (2) 管理栄養学科

(対象授業)

授業①: 小松洋一准教授 1 月 13 日(水) 3 限 3201 教室  
応用栄養学Ⅱ

授業②: 小川恒夫 教授 1 月 14 日(木) 4 限 3201 教室  
からだと疾病Ⅱ

(参観者)

授業①: 4 名

授業②: 1 名

(課題)

- ・ 教授会・学科会議等での周知は出来ているが、さらに学科内での参加促進を図る必要があると考える。
- ・ 各教員とも授業・実験・実習などが重なり、参観人数が少なくなってしまう傾向にある。そのため、参観をする授業時間帯について、多くの参加者が見込める時間設定、つまり 5 限等への時間の変更も必要になるかもしれない。

### (3) 食品開発科学科

平成 27 年度においても、教員の授業の教授法改善等を目的として、後期に授業参観を実施した。実施要領を以下に示す。

#### 【対象の授業一覧】

対象教員所属	対象教員	対象授業	対象授業日時	対象授業教室
環境園芸学科				
管理栄養学科				
食品開発科学科	中瀬昌之教授	食品学Ⅱ	1月13日(水)2限	宮:1411 教室
	外山英男教授	フードスペシャリスト論	1月14日(木)3限	宮:1411 教室
子ども教育学科				
教養・教職センター				

- \* 対象となった授業への参加は所属の学科・キャンパスを問わず参加できるものとした。また事務職員、短大教員も参加可能として、広く公開した。
- \* 教育歴の長い教員から順番に教員 2 名を選び、参観対象とした。今後、数年間で一巡する方針とした。今回、寺原学長が参観対象であったが、都合により中瀬教授と交代となった。

#### (実施手順)

- ・実施期間内にて対象授業の参観を実施する。
- ・参観者は教室内で対象授業の参観を行い、参観レポート(添付資料)を記入する。(当該レポートの様式は、後日メールにて配布する。参観を希望する教員は自身で印刷して参観に参加する。
- ・参観は業務等の関係もあるので教員への参加強制はしないが、できるだけ多くの教員に参加してもらおう。
- ・参観レポートは参観授業対象の教員へ提出する。

後期授業参観の結果の詳細については、本学の学科構成を考慮して、学科・センター別に以下に結果を示す。

## 【食品開発科学科】

### (1) 対象授業

2名の教員が担当する下記科目を授業参観対象科目として実施した。

日時	授業科目	担当教員	参観者	
1月13日(水) 2講時	食品学Ⅱ	中瀬	3名	山下博、工藤哲三、外山英男
1月14日(木) 2講時	フードスペシャリスト 論	外山	0名	

### (2) 参観結果

学科内で参観授業の実施について通知したにもかかわらず、参観者が少ない結果となった。他教員の授業を参観することへの教員の関心は依然として高まらない。このような状況がここ数年続いているが、これはこの授業参観に根本的な問題が潜んでいる可能性も示唆されるものである。授業参観は、授業実施教員の改善につながる可能性のみではなく、参観者にとっても、自身の授業改善に対する意識を必要に応じて高めることにもつながると考えられているが、この結果に対しては、さらに改善する必要がある。今後は、参観義務化の必要性の有無を検討することも選択肢の一つと考えられるが、授業参観の必要性についても検討する必要があるだろう。さらに、校務の多忙化により、参加したくとも参加できなかったケースがあると思われるので、その点についても検討が必要であろう。

### (4) 子ども教育学科

本学科では、2016年1月12日（火）に、下記の教員による参観授業が実施された。

○2限目 古賀 隆一 教授 「保育内容指導法」（造形表現） 参観者3名

本講義は、学生の興味・関心を引く内容構成の工夫がなされており、参考になるものであった。

### (5) 教養・教職センター

表 平成27年度 教養・教職センター授業参観と参加者数

担当教員名	参観授業名	実施日	参加人数
長友 泰潤	哲学	1月14日(木)	1名

表 平成27年度 センターのFD委員が参加した授業参観

担当教員名	参観授業名	実施日
古賀 隆一	保育内容指導法	1月12日(火)
川信 修治	施設園芸学	1月13日(水)
山口 雅篤	植物生理学	1月18日(月)
陳 蘭庄	植物資源科学	1月18日(月)

## 課題

参加者が少ないことが全大学の課題でもあるけど、参加できた教員は他の教員と気付きを共有すれば数値以上の結果が有りうる。センターのFD委員、スモール、ブライアンは授業参観を5回して、次回のセンター会議でその経験を共有した。

センターが提供した「哲学」の授業は学生グループのプレゼン中心、司会担当も学生だったし、参加型の授業だった。参観授業のプレゼンは「古代エジプトの文明」でした。内容が興味深くて、教養・教育の中心にしてから、他の教養または専門的な分野を見まわするのに役立ちそうだった。数学の始まり（ナイル川洪水後の畑の分配）とビールの始まりの話から教養科目の幾何学と生物学だけじゃなくて、専門科目の測量と発酵食品への繋がりも見えた。

「哲学」学生グループプレゼンの後に他のグループがそれぞれ質問した。大学か学科レベルで一番低い結果の「質問や発言をした」に組む工夫があった。

普通の講義で2つの学生グループがプレゼンするけど14日は1つのグループができなかったため、長友先生が古代エジプト文明をギリシアへ繋げて、ソクラテスの「無知の知」など大学教養科目に相応しい話を展開した。孟子の「性善説」との共通点まで見えるようにしたので、大学・教育らしく、自分の狭い時代・階級・地域から歴史・人類・地球へ総観・共観（I. A. Richards's *Synoptic View in Speculative Instruments*: 'The Idea of a University', 'Toward a More Synoptic View', and 'General Education in the Humanities'）を育つ機会だった。これは最初から、プラトンのアカデミーの時から、大学の使命であったので、プラトンの先生の模範・モデルであったソクラテスについての話から相応しい感覚であった。

センターのFD委員は英語講師で、次の「英語コミュニケーション」授業にクラシックの英語教科書「**絵で見る英語**」のBook 3へ独学で続けるように「哲学」の内容を動機になるに務めた。必修の授業で「**絵で見る英語**」Book 1しか使えないけど、Book 3へ段階的に進めば、孟子“Human nature is good.”とソクラテス“I do nothing men of Athens, but go about telling you, young and old, not to care for your bodies or your property so much as for your souls” (pp. 220-221) と会える。学生が多くななくても、役立つ英語の言葉・人類の思想に慣れたら、歴史の対話（Robert Maynard Hutchins's *The Great Conversation*）に参加できると感じたら大学の使命を果たすことになる。哲学だけじゃなくて千語ぐらいの英単語で、数学・幾何学“Six thousand years ago in Egypt there were people who saw how to measure their land through their knowledge about squares and triangles” (p. 174) と科学（Galileo, Newtown, William Harvey, and Joseph Priestley on pages 94, 106, 79, and 128）の流れも見ることができる。

センター以外の講義からもよい刺激がたくさんあったけど、限られた時間に共有したのは出席と席順の工夫。学生一人ひとりの名前を読んで出席の確認する先生もいればクイズ用紙で確認する先生もいた。講義中に学生が用紙を回す場合は、机・テーブル配置図に名前を書く形式と名簿リストにサインする形式があった。自分（スモール）の経験もだけど、席順を決めておくと出欠がとりやすそう。そして、注意をそらす誘惑が多い、学生が携帯電話によって、いつもアテンション・エコノミーに繋がっている今、教室の一番奥に行って講義を聞き（？）ながらSNSを意図的にしにくくなる。またはいつもの仲間グループと座れないと集中の方向の切り替えがしやくなる場合もありそうです。社会的に、文化的にどう携帯メディアと健康的に付き合っていけるかまだ落ちていない今は細かいとこ

ろまで注意を払いたい。大学と同じような「問いの共同体」(Community of Questioners)が作ったフリーソフトによる、名簿からそれぞれの教室の机配置にあった席順の表を生成できるようにしておきたい。

それぞれの先生が分野に熱心で解説が通じるのに尊敬すべき努力が見えたので細かいところに集中したのは失礼になるか心配だけど、貴重な内容については報告しきれない。参観の後、それぞれの先生と教育・授業・施設などの話の機会が増えた。

大学は本来、教育を行う「学者の共同体」(Paul Goodman's *Community of Scholars*)なので、特別な参観授業のイベントがなくても、普段お互いの講義の参加できるコミュニティーを目指すのが理想的である。普段の授業参加は支え合いと情報共有の促進になれば自然と教育と研究の両方の向上に繋る。